

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第14回)

## 野球のバット

2005年7月7日の朝、ロンドンで地下鉄とバスが爆破されるという同時多発テロが起きた。その前夜、オリンピックの2012年ロンドン開催が決定して国を挙げてのお祭り騒ぎだっただけに、その衝撃は凄まじかった。まもなく、実行犯として特定されたのは、イスラーム原理主義のパキスタン系イギリス人のグループだったが、この「イギリス人」という報道のされ方が印象的だった。彼らもまたイギリスで生まれ育ったイギリス人には違いないのだが、数年前にアメリカで起きたテロの際にブッシュ大統領が即座に「彼らと我ら」という言い方で「線引き」を行ったのとは対照的である。

その辺の感覚が日本人にはなかなかぴんと来ない、それがわかるような物語を芝居に書いてくれないか、と新国立劇場の栗山民也芸術監督（当時）が、まさにパキスタン系イスラーム教徒のイギリス人である劇作家シャン・カーン氏に依頼した。たまたまロンドンで在外研究期間を過ごしていた僕のところに上演のための翻訳の依頼がきたので、さっそくカーン氏に会いに行ってみると、重たい事件の直後であることを全く感じさせない気さくな、明るい、ユーモアたっぷりの人物だったので吃驚した。

さて、その後、彼の書き上げた戯曲『CLEANSKINS』を受け取って、読み始めてす

ぐのト書きで引っかかった。母と息子の二人暮らしの部屋に誰かが訪ねてきたという設定なのだが、「ノックの音に反応した母親が、恐る恐る野球のバットを手にしてドアに近づいていく」とある。え？ 野球のバット？ クリケットのじゃなくて？ イギリスでは野球はめったにやらないんじゃない…？ シャン、日本で上演することを意識して日本の文化に合わせたな？ 困るなあ、イギリスの生活を描いてほしいのに…とっていたら、このとき同時進行で翻訳していたトニー・パーソンの小説の中にこんなフレーズが出てきた — 「誰も野球はやらないのに、どの家にも野球のバットが置いてあるような地域」。なるほど、そうやって自衛の防犯対策をしなければならないほど物騒な地域というわけか。それにしても野球のバットとは…

この場面は、恐る恐るドアを開けると、そこには悪い連中と付き合っただけで数年前に家を出て行った娘の姿がある、と続く一顔をヒジャブで覆って。ここにはヤクザ者になって帰ってくるのと、イスラーム教徒になって帰ってくるのと、家族にはどちらがショックか、という問いかけがある。このデリケートな問題を扱った芝居は、かなりの評判をとった。ちなみに、CLEANSKINSとは、イスラーム教に改宗した白人を指す隠語だそうだ。